

猫はダンボール箱が大好き。ダンボール箱屋さんをやっているのと、そんな声をよく聞く。確かに、『彼女』はダンボール箱が大好きだった。でも、彼女はまるで、ダンボール箱にも愛されているかのようだった。

彼女が亡くなってからもうすぐ十七年になる今でも、年に一度、彼女を特別な感覚で思い出す日がある。それは彼女が亡くなった日。六月三日、梅雨の朝。

命日に故人を（故猫）思い出すのは普通の事だけど、彼女の場合は少し、それとは別の感じで思い出す。

彼女の名前はニヤアコ。事故で動けないでいたメス猫の彼女を家に連れて帰った日から約2年後、僕は実家を出て一人暮らしを始めた。ニヤアコは実家でそのまま暮らしていた。事故の影響もあり、普通の猫のような激しい動きはできなかったが、大好きなダンボール箱の中で、大好きなお昼寝をしながら、んびり、そしてなんとか、生きていた。ニヤアコはずっと別のダンボール箱を受け付けず、出会った日からずっと同じダンボール箱を使い続けていた。箱はもう、補修し過ぎてボロボロだった。



実家を出て数か月後、僕は結婚した。その時既に、妻は妊娠していた。予定日は、六月初旬のことだった。たまたま、妻と一緒に実家に帰ると、ニヤアコは妻のお腹を不思議そうに眺めたり、手をお腹に“ちよこん”と乗せたりしていた。ニヤアコなりに、何かを感じていたようだった。

ニヤアコを拾ってきた当初、『あまり長くは生きられないかも』と獣医さんに言われていたが、その時既に三年近く経っていて、誰もがその言葉を忘れていた。

でも、思い出した。

六月二日の夜中十一時頃、妻に“おしるし”が来たので、妻を病院に連れて行った。病院に妻をおいて、僕はひとまず家に帰った。

『ああ、いよいよかあ。男の子かな？ 女の子かな？ 名前、どうしようかな？』と、父親になる人なら誰もがするを想像しながら、僕は家に帰った。

家につくと、夜中にも関わらず、不意に電話が鳴った。

『こんな時間に、誰だよ・・・？ もしかして、もう生まれたとか！』

電話は、実家の姉からだった。

『あのね、ニヤアコが、ニヤアコの容態が急に悪くなって、すぐ来れる？』

『あ、う、うん、えっと、わかった、すぐ行く』

直前までのウキウキした気持ちからうまく切り替えができず、ぼーっとしながら今度は実家に向かった。実家に着くまでの運転中のことは、実は今でもあまり思い出せない。

実家に着いた頃、日付は既に次の日（六月三日）になっていた。

ただ、僕は間に合わなかった。姉は、『ほんの、ついさっき』と言った。

ニヤアコは、あのダンボールの中で静かに横たわっていた。触ってみると、まだ少し温かった。不思議と、涙は出なかった。『あまり長くは生きられないかも』という言葉を、表向きは忘れていたが、僕の中にはずっと、ニヤアコを飼うと決めた日からずっと、早い別れの覚悟があったのだと思う。それと、ニヤアコが三年近くも生きたことも、ほんの少し、良かったと思えたのかもしれない。

『明日、庭に埋めてあげよう。明日、昼間にまた来るよ』

僕はそれだけ言い残して、家に戻った。妻が今病院に行っていることは、その時は話せなかった。

帰りの運転中、僕の頭の中は、生まれてくる子供のことよりも、少しニヤアコ寄りだった。ただ“悲しくてやりきれない”的な感情はなく、少し沈み気味ながらも、どこか落ち着いていた感じだった。

家に着き、部屋の明かりをつけるのも忘れて、僕は床にどっと横たわった。『なんだか、忙しい夜だな・・・』とほんの少し微笑んで、ふっと眠ってしまいそうになったその時、電話の留守電ランプの点滅に気が付いた。



『今度は誰だろう？』

電話は妻の居る病院からだった。

『おめでとうございます。元気な女の子ですよ。来られるようなら、ぜひいらっしやって下さい。ピー、、、ツ、ツ、ツ、ツ、』

僕はしばらくの間、状況を把握できず、受話器を持ったままでした。

『あ、ええっと、生まれた？ 誰が？ ああ、僕の子供が生まれたのか・・・。』

ああ、生まれたのか。女の子、生まれたんだ！』
こんな、人生の一大事にも関わらず、僕は幾分ぼーっとした頭で、再度車で病院に向かった。

今度の運転中の頭の中は、少し生まれた子供寄りだったが、ニヤアコの事もまだまだ大きかった。子供の事と、ニヤアコの事が、頭の中でぐるぐる音を立てて回っていた。

その時だった。ふっと涙が少し、こぼれた。

本当にほんの少し。
でも、“どっちの涙”かは解らなかった。



運転中に涙が溢れてくる経験をしたことのある人なら解ると思う。なんてことはない、ただ車をとめて泣いてしまえばいいのに、そんなことすらもわからないし、何より前が見えにくくて危ない……。今思えば、さつき実家でニヤアコを見た時に、思いつき泣いてしまえば良かったんだ。

ほんの少しの涙が呼び水となってしまい、運転しながら、涙が、次から次へと、どンドン、流れてきて、どうしようもなくなってしまった。

『やった、やったよ、女の子が生まれた。僕も父親になった。あれ、でもさっき、ニヤアコが死んじゃったばかりで、ニヤアコは事故で動けなかった時に拾って、さつき触ったニヤアコはまだ少し温かくて、ふわふわしてて、今から会いに行く子は、生まれたばかりだから、たぶんやっぱり温かくて、ふわふわで、ついこないだは、お腹の中の子とニヤアコが何か話してて、ニヤアコはあのダンボール箱が大好きで、女の子が生まれたら、なんて名前にするんだっけ？ それで、それで、ええと、ええと、』
僕はそのまま、運転し続けた。

病院に着くころには、だいぶ泣き切っていた。たぶん、目は真っ赤だったと思うけど、このシチュエーションなら、誰も変に思わないだろう。

僕は割烹着のようなものを着せられ、妻と子供の居る部屋に通された。
妻は真っ赤な目をした僕を見て、『そんなに嬉しかったの？ 目が真っ赤だよ』と少し笑っていた。僕は、『あたりまえじゃん。そんなに嬉しいに決まってるじゃん。 ありがとう。お疲れ様。』と返した。

病院の外に出ると、もう朝になっていた。少し雨が降っていた。六月三日、梅雨の朝だった。妻には、ついさつき、ニヤアコが逝ってしまったことは言わなかった。

昼過ぎ、僕はニヤアコを庭に埋葬する為、再度実家に行った。

穴を掘り終わると、家族全員がその場に来てくれた。その時、僕の父がこう言った。

『なあ、このダンボール箱ごと、埋めてやろうよ』

『ええ？ダンボール箱も？ だって、それじゃ土に帰るのが遅くなっちゃうじゃない』

『でも、ニヤアコ、このダンボール箱、好きだっただろ？ うちに来てから、ずっとこのダンボール箱だったじゃないか。もうボロボロだけど、今日この日まで、なんとか持ちこたえたのも、ニヤアコの為に頑張ったからじゃないかな？ 箱も、そう望んでいるんじゃないかな』

ダンボール箱の、思い……。

父がそんなことを言うなんて、ちよつと意外だった。でも、その言葉に反対する者は、当然いなかった。

僕は再度、箱も入るほどの大きさに堀直し、箱とニヤアコを埋葬した。ニヤアコはそのダンボール箱が大好きで、そのダンボール箱もニヤアコが大好きだった。二人は、これからもずっと一緒だ。

お祝い事とお弔いが同じ日に来ることは、確かに珍しい。もしお弔いが人間だったら、もっと大変だったと思う。でも、拾った猫と自分の娘の組み合わせは、僕に素敵な記憶を残してくれた。

数日後、一つわかったことがある。それは、娘が生まれた時刻と、ニヤアコが亡くなった時刻がほぼ同時刻、ということ。このとらえ方は人それぞれだけど、僕はニヤアコが娘の誕生を見届けてくれたのかもしれない、と、勝手に思っている。出産を経験した方には大変申し訳ない表現ですが、助産婦さん曰く、『近年まれにみるほどの超安産だった』と言っていた。ニヤアコが、妻の辛さを少し手伝ってくれたのかもしれない、と、勝手に思っている。ニヤアコが、僕にくれた精一杯のお礼だったのかも、と、勝手に思っている。

あれから十六年、娘はもちろん十六才。今年の六月三日も、毎年と変わりなく、ニヤアコを思い出した。きつとあのダンボール箱の中で、お昼寝してるよね。

おしまい。



イラスト：森 俊憲